



換喩的発話行為 : 日英語における発話行為の修辞性

小松原, 哲太

(Citation)

認知言語学論考, 12:45-80

(Issue Date)

2015-03

(Resource Type)

book part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008922>



換喩的発話行為

— 日英語における発話行為の修辭性 —

小松原哲太

1. はじめに

ある発話は様々な言語機能の側面をあわせもつ。例えば「火事!」という発話の機能は、少なくとも、火事という概念の指示機能の側面、火事が出たという事態叙述の機能の側面、場合によっては火を消せという命令、あるいは火事から逃げろという警告の行為的機能の側面をもつ。本論では、発話の行為的側面、すなわち**発話行為**(speech act)の機能に注目する。

以下の発話では、活用形や特定の文末表現、発話行為の特定のタイプをあらゆる慣用表現によって、どのような発話行為を意図しているかが示されている。

- (1)a. ここへ来て座りなさい。
- b. わざわざありがとうございます。
- c. 京都は古い寺がたくさんある。

とりたてて特定の文脈が与えられなければ、(1a)は「なさい」という形式か

ら命令, (1b)は「ありがとうございます」という定型表現から感謝, (1c)では「ある」の終止形から陳述が意図されていると解釈される。一方, 前後の談話文脈や発話の状況から, ある発話がデフォルト的な解釈とは異なる発話行為的機能を担う場合もある。

- (2) A: 明日はどうする。
 B: 京都は古い寺がたくさんある。
 A: じゃ, ひとつ行ってみるか。

(2)のBの発話は, (1c)と全く同じ表現形式であるにもかかわらず, この場合には陳述ではなく, Aの反応から実質的には提案として解釈されることが分かる。このように, ある発話は, コンテキストによって, 文字通りに表す行為とは別の行為を表す場合があり, この現象は**間接発話行為**(indirect speech act)とよばれる⁽¹⁾。間接発話行為の現象は, 日常言語における慣用表現の中に広く観察される。(3a)は質問で依頼を, (3b)は陳述で依頼を, (3c)は陳述で命令を表す間接発話行為とみることができる。

- (3)a. Can you reach the salt?
 b. I want you to do this for me, Henry.
 c. You ought to be more polite to your mother. (Searle 1975: 65–66)

(2)や(3)では, 文字通りの意味を手がかりとして, 前後文脈から話し手の意図する発話行為が理解される。本論では, この発話行為の間接的言語理解の現象を, **換喩**(metonymy)現象との関連で分析する。換喩とは, 一般に, ある事物でそれと近接性をもつ別の事物を表す修辞(i. e. レトリック)とされる(Bain 1887: 186–195)。「近接性」という用語の解釈によって, 換喩という言語現象の範囲はかなり伸縮する⁽²⁾が, ある行為の成立とその必要条件といった, 発話行為の語用論的構造に関する関係を換喩の近接関係とみる立場からは, 間接発話行為は換喩の一種であるとされる(山梨 1982, 1988: 115–

120, 2004: 82–84, Thornburg and Panther 1997, Panther and Thornburg 1998)。本論では、「近接性」の概念を広義にとり、間接発話行為を発話行為レベルの換喩として位置づけていく。

従来の研究では、間接発話行為と、より直接的な発話行為との関係に関する語用論的な構造の一般化が主な論点となってきた(Gordon and Lakoff 1975, Searle 1975)。その一方で、間接発話行為が担う特有の機能については省察されていない。間接発話行為は、日常の言語コミュニケーションに欠くことのできないポライトネスや婉曲性などの表現効果を与えるという、修辭的な機能をもっている。この間接発話行為の機能の問題については、依頼や命令といった特定の発話行為タイプの事例分析の研究はみられるが、発話行為の一般的な認知メカニズムの観点に立った体系的な分析はみられない。本論では、換喩的認知というより一般的な認知メカニズムの観点から、間接発話行為をレトリックの一種として位置づけることにより、間接発話行為の修辭的機能とその認知的動機づけに関する体系的考察を行うことを目的とする。

本論の構成は次の通りである。まず2節では、間接発話行為と換喩の典型例を比較し、間接発話行為が広義の換喩現象として位置づけられることを論じる。3節では、間接発話行為の分析の理論的準備として、発話行為に関する一般的な認知モデルを示し、個々の発話行為の認知構造を明らかにする。4節では、間接発話行為の認知プロセスの事例分析を行い、5節では、間接発話行為の修辭性の問題について、換喩のプロセスの観点から考察を行う。6節は、本論の結語と今後の展望である。

2. 発話行為の換喩現象

間接発話行為では、ある文字通りの発話行為を介して、別の発話行為を理解するプロセスが問題となる。本節では、この発話行為の間接的理解のプロセスが、広い意味での換喩の認知プロセスとして位置づけられることを示す。

一般に、言語表現の意味は、言語使用の文脈によって柔軟に変化する。その最たるものが換喩(metonymy)の現象である。換喩とは、ある存在で、それと近接性をもつ別の存在を表す修辞をいう。換喩の典型例として、例えば「最近漱石を読んでいる。」という表現を挙げることができる。文脈抜きに固有名詞「漱石」が文字通りに表すのは人物であるが、「Xを読んでいる」という構文の中では、実質的には作品を表す。ここでは、作者—作品の近接関係にもとづいて実質的な指示対象の理解が可能になる。近接性(contiguity)という用語を最も広い意味で用いる場合、あるドメインにおける近接関係に動機づけられている点で、(4)はすべて換喩的といえる。

- (4)a. あの赤のドレスと話してみたい。[付属物—主体]
- b. あの作家がついに筆を置いた。[前件—後件]
- c. 空に白いものが舞っていた。[類—種]
- d. あの棚の本、手、届きますか。[質問—依頼]

(4a)は空間的な隣接関係、(4b)では時間的な継起関係、(4c)ではカテゴリー化におけるタイプと事例の関係、(4d)では行為のシナリオ知識に関する関係性が、それぞれ問題となる。

本節の主眼となるのは、(4d)のような発話行為レベルの事例である。表1は、(4a)のような換喩の典型例と(4d)のような間接発話行為の関係を示す。(4a)のような換喩では、一般に、名詞句が文字通りに指示するもの(e. g. ドレス)と、述語文脈の中で実質的に指示するもの(e. g. 人)との間に不一致が存在する(Langacker 1993: 29)。これに対して、(4d)のような間接発話行為では、一般に、発話が文字通りに表す行為(e. g. 質問)と、談話文脈において実質的に表す行為(e. g. 依頼)との間に不一致が存在する。つまり、換喩と間接発話行為は、ともに文字通りの機能と、文脈上の機能との不一致が存在するという点で共通している。

その一方で、間接発話行為は、聞き手の反応を含めた、文と文の間の談話文脈が問題となる点で、文レベルの文脈が問題となる換喩の典型例とは異なる

る。(4a)の換喩解釈には、「Xと話してみたい」という構文環境が問題となるが、(4d)を間接発話行為と解釈できるのは、「あとでもいいですか」「すぐ取ってあげます」のような聞き手の反応が談話文脈として与えられる場合のみであり、「はい、届きます」とだけ言って何も行動しない聞き手にとっては、(4d)は文字通り質問となる。

表1 発話行為の換喩性

	機能	文脈	近接性のドメイン
換喩の典型例	指示	文	空間
間接発話行為	発話行為	談話	シナリオ

また、間接発話行為は、近接性のドメインに関しても典型的な換喩とは異なる。まず(4a)の換喩では、空間的な隣接関係、すなわち空間のドメインにおける物理的な近接性が、文字通りの指示対象から意図された指示対象へのアクセスを動機づけている。これに対して、(4d)の間接発話行為では、シナリオのドメインにおける相互行為に関わる近接性が、文字通りの発話行為から意図された発話行為へのアクセスを動機づけている。

ここでシナリオとよぶ概念は、ある行為の成立に関わる社会的あるいは言語的相互行為のモデルにあたるものである。例えば、依頼という発話行為が成立するためには、少なくとも、発話主体の役割、行為の前提、意図される結果や期待に関する条件が整っている必要がある。(4d)の質問のターゲットとなっている文字通りの内容は、聞き手が棚の本に手が届くかどうかということ、つまり聞き手の行為の実行可能性であるが、(4d)が間接発話行為と解釈される場合には、この文字通りの質問内容を依頼シナリオの一部として位置づけることが問題となる。つまり(4d)の間接的言語理解には、依頼シナリオのドメインにおける部分—全体の近接関係が反映されている。

以上のように、典型的な換喩と間接発話行為は、文脈やドメインに関する差異があるものの、近接性という共通点をもつ。したがって換喩の定義から、間接発話行為は、広義には換喩の現象である。本論では、間接発話行為の換喩性に注目し、間接発話行為をレトリックの一種として位置づけること

で、その修辭性のメカニズムに関する考察を行っていく。

3. 発話行為シナリオの性質

本論では、ドメインの種類によらない一般的な「近接性」にもとづく修辭現象を、広く換喩とみる立場をとる。間接発話行為は、発話行為レベルの換喩現象である。発話行為レベルの換喩では、シナリオ知識のドメインにおける近接関係が問題となる。ここではまず、個別の発話行為のシナリオに関する基本的性質の記述を通じて、間接発話行為の分析のための理論的準備を行う。

3.1 発話行為シナリオ

一般に、発話行為の理解には、単に言語表現の文字通りの意味だけでなく、その発話の行為的側面を特徴づける、適切性の条件の理解が問題となる (Searle 1969)。例えば、(4d)が依頼となるためには、(i)話し手が棚に届かないこと、(ii)話し手が聞き手の手伝いを希望していること、(iii)聞き手が棚に届くこと等の条件が満たされる必要がある。より一般に、依頼の適切性条件としては、少なくとも次の要因が挙げられる。

(5) 〈発話行為成立の必要条件〉

- a. 話し手の側からの行為遂行への願望・興味・欲求
- b. 聞き手の行為遂行の能力・意志・義務
- c. 行為遂行の動機・意義・理由
- d. 行為遂行の否定的条件・懸念
- e. 行為遂行の結果に対する判断・評価 (山梨 1988: 118)

日常会話においてなされる依頼では、話し手や聞き手は、(5)に示すような行為成立の諸条件が満たされているかどうかを個別に確認、認識するわけ

ではない。しかし、分析的に内省すると、これらの条件が前提となっていることが理解されるのも事実である。したがって、話し手や聞き手は適切性の条件を統合的に認知しており、例えば「依頼」という行為はこういうものである、というような発話行為のモデル、1つの行為のゲシュタルトとして適切性条件の総体を認知していると考えられる。

ある発話行為から想起される、行為の成立に必要な諸条件をスキーマ的に表す文化的な認知モデルは、**発話行為シナリオ**(speech act scenario)とよばれる(Langacker 2008: 470–475)。Langacker(2008: 473–475)は、行為内容と認知主体の相互関係の動的変化の観点から、発話行為シナリオの分析を行っている。図1は、発話行為の基本タイプである陳述(statement)、命令(order)、質問(question)に関する発話行為シナリオの図式である。(6)のもつ発話行為の機能には、これらの発話行為シナリオの基本的性質が反映されている。

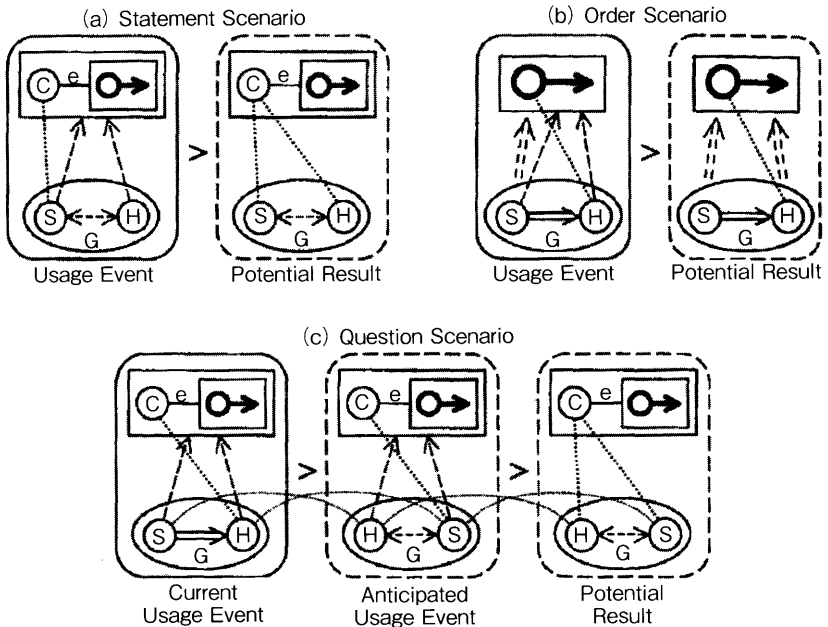


図1 発話行為シナリオ (Langacker 2008 : 474)

- (6)a. He is sitting next to me.
 b. Sit there.
 c. Is anybody sitting here?

図1(a)は、(6a)のような陳述に反映されるシナリオを表す。(6a)の発話が文字通りにプロファイルするのは、太線の円と矢印を囲む内側のボックスが表す [he is sitting next to me] というプロセス(process; p)である。しかし、陳述という行為の成立には、プロセスに対する話し手(speaker; S)や聞き手(hearer; H)の主観的態度が関わる。発話イベント(Usage Event)において、話し手が(6a)を発話する時、話し手と聞き手はともに p に注意を向ける(破線の矢印)が、p が成り立つと判断しているのは話し手である。プロセス p と認知主体(conceptualizer; C)を結ぶ線に示される**認識的スタンス**(epistemic stance; e)は、認知主体の主観的態度に対応する。C と S を結ぶ点線に示される対応関係は認識的スタンス e の主体が話し手であることを示し、この場合には、話し手の確信(belief)を表す。予測結果(Potential Result)における認知主体 C、話し手 S、聞き手 H の三者を結ぶ点線が表す対応関係は、理想的な陳述のモデルにおいては、発話により S と H がプロセス成立の確信に至ることが期待されることを示している。

図1(b)は、(6b)のような命令行為のシナリオを表す。図1(a)に示す陳述の場合には、話し手の発話は、グラウンド(ground; G)における聞き手との相互作用(破線の両矢印)を前提とする。これに対して、図1(b)に示す命令の場合では、S と H の関係は単なる相互作用ではなく、S から H への社会的又は心理的な力(二重矢印)が問題となり、ここでは命令によって話し手が聞き手を着席させようとする命令の力が問題となる。グラウンドから命題への破線の二重矢印で表される**実効的スタンス**(effective stance)は、発話主体の注意の対象となるプロセス p = [you sit there] が現実に生起するか否かに関わる態度を表す。理想的な命令シナリオの予想結果においては、H が実効的な反応をとること、すなわち着席を実行することが期待される。

図1(c)は、(6c)の質問を特徴づけるシナリオに対応する。質問は返答を

伴う(e. g. Is anybody sitting here? > No.)ものであり、質問に対してHの返答が見込まれることが、期待発話イベント(Anticipated Usage Event)として示されている。ここで質問のシナリオは、質問>返答>共通理解という発話行為の談話的連鎖と認識状態の遷移として特徴づけられる。

3.2 行為のコントロールサイクル

3.1節の考察からも分かるように、発話行為の成立には、単に言語表現が文字通りに表すプロセスの意味内容だけでなく、プロセスに対する発話主体の認識的スタンス、および実効的スタンスが問題となる。ここでは発話主体のスタンス変化に焦点をあてて、発話行為シナリオの性質をより一般的な観点から論じる。

Langacker(2009a: 161)によれば、発話行為シナリオにおけるスタンス変化に関わる動的な概念化のプロセスには、**コントロールサイクル**(control cycle)が関わっている。コントロールサイクルは、物理的、知覚的、心的、社会的な経験に広くみられる経験を特徴づける認知モデルであり、非常に広範な言語現象における動的認知の基盤となるものである(Langacker 2002: 193, Langacker 2013: 151-153)。コントロールサイクルは、基準相(baseline phase)を基準状態として、潜在相(potential phase)、行為相(action phase)、結果相(result phase)への漸次遷移を1つの単位とし、主体(actor; A)があるターゲット(target; T)を自らの支配領域(dominion; D)に取り込む(capture)か回避する(avoid)かの選択に関わる認知モデルである。図2は典型的なコントロールサイクルを図式的に示すものである。

例えば、猫がネズミを捕まえるという場面を考えてみよう。ここでは、猫が視界にネズミを発見し [Potential]、ネズミを捕まえて [Action]、ネズミを支配下におく [Result] という一連の流れが、物理的なレベルにおけるコントロールサイクルをなす。この例では、それぞれ、A=[猫]、T=[ネズミ]、F=[視界]、D=[猫のコントロール領域]と対応する。

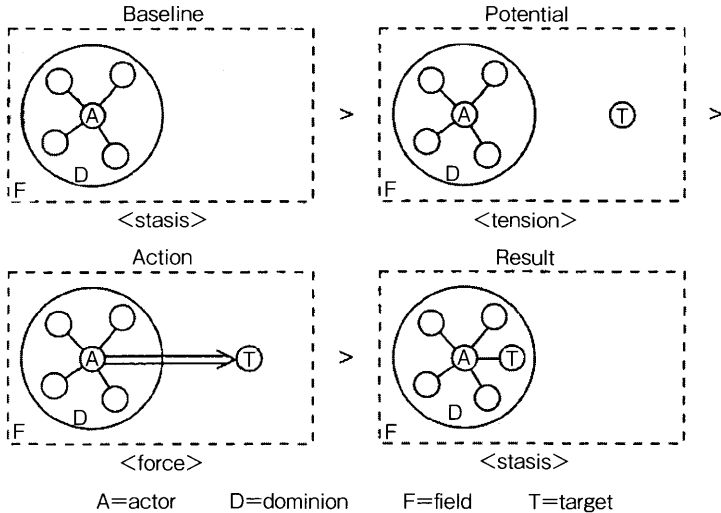


図2 コントロールサイクル (Langacker 2002: 193)

発話行為の場合、コントロールサイクルのターゲットは行為である。例えば、レストランで水を頼むという場面を考えてみよう。ここでは、客が水を欲しくなり [Potential], 「お水を下さい」と発話して [Action], ウェイターが水を持って来る [Result] という一連の流れが、行為のレベルにおけるコントロールサイクルをなす。この例では、それぞれ、A=[客/ウェイター], T=[水を持って来る/行くこと], F=[実現する可能性のある事態の集合], D=[実現した事態の集合] と対応する⁽³⁾。

図3は、図1(b)に示した命令シナリオをコントロールサイクルの観点から捉え直したものである⁽⁴⁾。図3の命令シナリオは、例えば、(7)の命令の機能に反映されている。

(7) お前は出ていけ。

(7)が文字通りにプロファイルするのは、図3中上部の太線に示される二人称単数(2s)代名詞「お前」をトラジェクター tr とする空間的移動のプロセス

(process; p)である。このプロフィールが命令のターゲットとして機能するためには、少なくとも図3に示すコントロールサイクルがベースとして想起される必要がある。

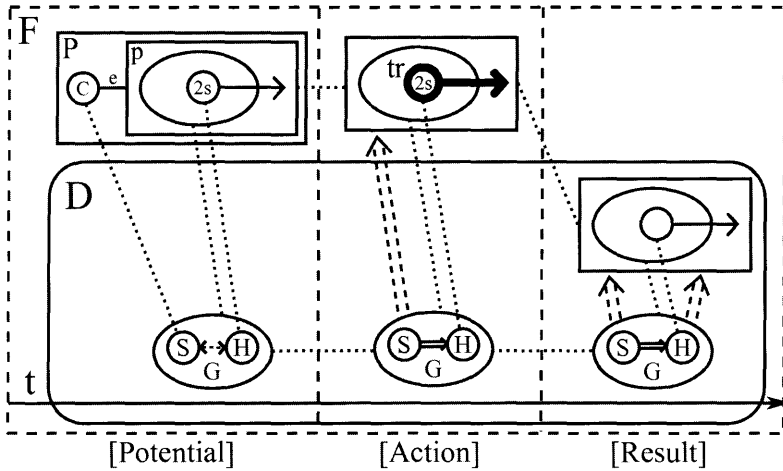


図3 命令の発話行為シナリオ

ここでは $A = [\text{グラウンド } G] (= [\text{話し手 } S / \text{聞き手 } H])$, $T = [\text{プロフィールされたプロセス}]$, $F = [\text{実現する可能性のある事態の集合}]$, $D = [\text{実現した事態の集合}]$ と対応する。第一に、命令シナリオの潜在相 [Potential] は、命令の前提条件を表し、要望(desire)の認識的スタンス e を伴う命題内容 $P = [\text{話し手は} [\text{聞き手が出ていく}]_p \text{のを望む}]$ ことに対応する。第二に、行為相 [Action] は、 S の発話「お前は出ていけ」に対応する。 S から p に伸びる破線の二重矢印は、命令の実現に対する S の実効的スタンスを表し、 S から H への二重矢印は、話し手の聞き手に対する命令の力を表す。第三に、結果相 [Result] は、 S と H がともに実効的スタンスをとり、命令に従うことを表す。 p がドミニオン D に取り込まれ、 H が命令内容を実行することが示されている。このように、発話行為シナリオをコントロールサイクルとして捉え直すことによって、発話行為成立に関わる認識的・実効的スタンスのダイナミックな変化の問題を、より一般的な形で論じ

ることが可能となる。

3.3 発話行為のネットワーク

本論の主眼となる間接発話行為に関わる、シナリオドメインにおける近接関係を論じるためには、個別の発話行為シナリオの性質を分析しておく必要がある。ここでは、コントロールサイクルの観点から個々の発話行為シナリオを比較分析し、個別の発話行為シナリオの性質と、基本的な発話行為タイプの相互関係の記述を行う。

3.3.1 結果相のスタンス

3.2節で示したように、発話行為の成立には、認知主体のスタンス変化の問題が関わる。ここでスタンス(stance)とは、事態に対する発話主体の態度をいう。まず、発話行為シナリオの結果相、すなわち発話によってもたらされるスタンスの変化に注目して、発話行為のタイプの差異をみてみよう。例えば、陳述と質問の差異は、結果相における聞き手のスタンスの相違によって特徴づけられる。

- (8)a. This is a type of mushroom.
 b. Is this a type of mushroom?

スタンスには、**実効／認識の対立**(effective/epistemic opposition)が存在する。一般に、実効的レベルは事態の生起に関わり、認識的レベルは事態の知識に関わる(Langacker 2010: 182)。(8a)では、聞き手は話し手の発話内容に対して、認識的なレベルで反応する(e. g. 納得する、怪しむ等)ことのみが期待されるのに対して、(8b)では、聞き手は、*Yes*あるいは*No*の言語的反応、すなわち発話という行為による実効的なレベルでの反応が要求される。より一般に、陳述、主張、予測等の発話行為と、質問、忠告、依頼、命令等の発話行為の差異は、結果相における聞き手のスタンスの相違によって特徴

づけられる。

結果相において、聞き手ではなく話し手に実効的スタンス(i. e. 行為の実行)が要求される行為も存在する。

- (9)a. Try this mushroom, please.
 b. I promise you I will eat this mushroom.

(9a)の依頼では、聞き手がきのこを食べることが期待されるのに対し、(9b)の約束では、話し手がきのこを食べることが期待される。より一般に、質問、忠告、依頼、命令等の発話行為と、約束、誓願等の発話行為の差異は、結果相において期待される実効的スタンスの主体が話し手、聞き手のいずれであるかによって特徴づけられる。

3.3.2 潜在相のスタンス

次に、潜在相におけるスタンスに注目してみると、発話行為のタイプによって、話し手の認識的スタンスには多様性がみられる。

- (10)a. うちの犬はごはんを食べる。
 b. うちの犬にごはんをやってください。
 c. 旅行中は、犬にごはんをあげておきます。
 d. うちの犬にごはんをやってくれて、ありがとう。

[うちの犬がごはんを食べる] というプロセスを p とすると、(10a)の陳述では、[p を信じる] (BELIEF) という確信、(10b)の依頼では [p を望む] (DESIRE) という要望、(10c)の約束では [p を実現させるつもりである] (INCLINATION) という意向、(10d)の感謝では [p してくれたことに感謝する] (APPRECIATION) という感謝の認識的スタンスが、発話行為成立の前提となる。

潜在相におけるスタンスが特に規定されないタイプの発話行為も存在する。

(11) この犬は、シロという名前にする。

(11)によって、犬の命名という行為が成立する場合の主な前提条件となるのは、認識的スタンスよりはむしろ、話し手が犬の飼い主であること、命名の権限をもつ人物であるというような社会的条件であり、無関係の第三者が(11)の発話をしたとしても、聞き手を納得させることはできない。

潜在相における認識的スタンスのタイプは、いくつかの発話行為のタイプを規定する。(10a)のような陳述・主張等は確信のスタンス、(10b)のような質問・忠告・依頼・命令等は要望のスタンス、(10c)のような約束・誓願等は意向のスタンスが、発話行為成立の前提となる。また、(10d)のような、感謝や謝罪等の発話行為では、潜在相における認識的スタンスの種類が発話行為のタイプに直接影響する。(11)のような命名・宣告等では、潜在相の認識的スタンスが無規定的であること自体が、発話行為のタイプを特徴づける性質となっている。

3.3.3 発話の力

最後に、行為相における力の強度に注目して、発話行為の差異をみてみよう。スタンス構造の差異が発話行為の基本的なタイプの区別に影響するのに対して、発話の力の強度は、発話行為のより詳細な区別を特徴づける。ここでいう力(force)の強度とは、行為の遂行に関する義務性をいう。例えば、依頼と命令は、スタンス構造は同一であるが、力の強度に差異がみられる。(12)では、力の強度によって、陳述、主張、結論が区別される。

- (12)a. 犬は^{あるじ}主に従順なものだ。
- b. 一般に、犬は主に従順であるといえる。
- c. 結論として示されるのは、犬は主に従順であるということである。

(12a)の陳述では、聞き手がこれに同意するか否かは選択的(optional ; (F))であり、発話の力は相対的に弱い。これに対して、(12b, c)の言い回しでは

発話の力は相対的に強くなる。(12b)の主張的発話では、聞き手に同意を要求する力は陳述よりも強く、賛同するか否かの交渉が求められる点で協定的(negotiable; F)といえ、(12c)の結論的発話では、結論するという行為の成立に聞き手が賛同することが含まれている点で、発話の力は義務的(obligatory; FF)な強さをもっている。一般に、陳述・主張・結論や、命令・依頼などはそれぞれが明確に区別できるものではなく、厳密には話し手の意図と聞き手の解釈によって、相対的に規定される区分である。

3.3.4 発話行為の相互関係

以上のように、コントロールサイクルの観点から発話行為の基本タイプを分類していく場合には、少なくとも、(i)潜在相におけるスタンスの種類、(ii)行為相における発話の力の強度、(iii)結果相におけるスタンスの種類が問題となる。この種の指標は、従来の発話行為分類に認知的動機づけを与えるものである。従来の発話行為の体系的分類としては、例えば、サールによる発話行為の5分類が挙げられる。(Searle 1975, 山梨 1986: 20-29)。

(13) 〈発話行為の基本タイプ〉

- | | |
|----------------------------|-------------------|
| (i) 陳述表示型(Representatives) | : 陳述・主張・分類・結論・予測等 |
| (ii) 行為指導型(Directives) | : 忠告・質問・命令・許可・依頼等 |
| (iii) 行為拘束型(Commissives) | : 契約・保証・約束・誓願・提案等 |
| (iv) 態度表明型(Expressives) | : 謝罪・祝福・感謝・歓迎・哀悼等 |
| (v) 宣告命名型(Declaratives) | : 任命・判決・命名・宣言・拒否等 |

表2は(13)の発話行為の基本タイプの相互関係を、発話行為シナリオの観点からみたものである。表2から示唆されるように、発話行為の基本類は、最も抽象的なものから最も具体的なものへという厳密な階層(taxonomy)をなすものではなく、スタンスの性質や力の強さなどのさまざまな次元の複合的な関係からなるネットワーク(network)をなしている。発話行為シナリオの観点から個別の発話行為の性質を分析することによって、

表 2 発話行為シナリオの相互関係

発話行為 の 基本類	基本レベルの 発話行為	スタンス						力 行為相
		潜在相			結果相			
		主体	実効性	種類	主体	実効性	種類	
態度 表明型	謝罪 (apology)	S	認識的	謝罪	H	認識的	赦免	F
	感謝 (appreciation)			感謝			配慮	FF
陳述 表示型	陳述 (statement)	S	認識的	確信	H	認識的	確信	(F)
	主張 (assertion)			意向			意向	(F)
	予測 (prediction)			意向			確信	(F)
	返答 (answer)	H	実効的	質問	S		確信	(F)
行為 指導型	質問 (question)	S	認識的	要望	H	実効的	返答	FF
	忠告 (advice)							(F)
	依頼 (request)							F
	命令 (order)				FF			
行為 拘束型	約束 (promise)	S		意向	S		F	
	誓願 (vow)				FF			
宣告 命名型	命名 (naming)	*	*	*	S/H		命名	FF
	宣告 (sentence)						宣告	FF

(* は内容が無規定的であることを示す)

従来の発話行為の分類を認知プロセスの観点から体系的に捉え直し、発話行為のメカニズムを一貫した観点から考察することが可能となる。

4. 間接発話行為の認知プロセス

2節でみたように、発話行為の間接的理解は、ある行為の必要条件の一部を言語化することによって、問題の行為が理解される現象として特徴づけられる。この部分から全体を理解する換喩のプロセスは、「発見的な推論」である点で、狭義の換喩や提喩の表現と共通している(図4; 山梨 1988: 117-120)。

物体やカテゴリー、シナリオの全体をP、部分をQとするならば、「広い意味での論理的な含意関係からP→Qが成り立つ」(ibid., 119)。これに対して、Qへの言及からその「意味解釈としてPを推定していくプロセスは、

しかるべき文脈との関連で暫定的にしか決められない」(ibid., 120)。この点で、狭義の換喩・提喩表現や間接的な発話解釈のプロセスは、Qから暫定的な仮説としてPを推定する、発見的な推論の特徴を備えていることになる。

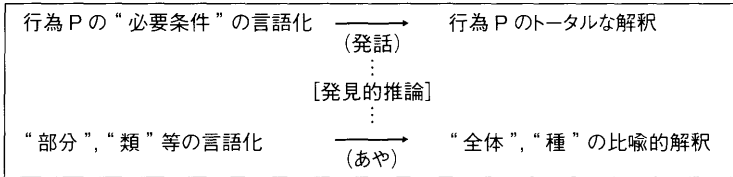


図4 間接発話行為の換喩性 (山梨 1988 : 119)

この間接発話行為に反映される換喩的な発見的推論のプロセスは、発話行為シナリオのドメインにおいて、どのように具体化されているのであろうか。以下では、3節で詳説した発話行為シナリオの性質にもとづいて、間接発話行為に反映される発見的推論のプロセスの具体的内容を分析していく。

1つのシンプルな発話行為には、1つの発話行為シナリオが関わるのに対し、間接発話行為では、2つの発話行為シナリオの複合性が問題となる (Langacker 2008: 471)。(14a)のような発話では、文字通りの意味から依頼シナリオが直接想起されるのに対して、(14b)(14c)のような間接発話行為では、文字通りの意味から想起される質問や陳述のシナリオが、依頼の発話行為シナリオの一部として解釈されることによって、依頼行為が間接的に遂行される (ibid.)。この種の発話行為の間接的理解には、2つのシナリオの統合的理解が関わる。

- (14)a. Take out the garbage, please. [依頼]
 b. Can you take out the garbage? [[質問] 依頼]
 c. I would like you to take out the garbage. [[陳述] 依頼]

[time]	T ₁	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅	T ₆
[stance]	S _{ep} <DESIRE>	S _{ef} <QUESTION>	H _{ef} <ANSWER>	S/H _{ep} <BELIEF>	S _{ef} <REQUEST>	H _{ef} <*>
Question	Potential	Action	Result		[R]	
Answer	Potential		Action	Result	→	
Request	Potential				Action	Result [T]

(S=speaker, H=hearer, ep=epistemic, ef=effective)

図5 依頼の間接発話行為

図5は、(14b)のような典型的な依頼の間接発話行為に反映される、複合的な発話行為シナリオである。発話行為シナリオをコントロールサイクルとみる観点(3.2節)からは、発話行為シナリオの複合性の問題は、一般に、コントロールサイクルの複合性の問題として捉えることができる⁽⁵⁾。この点からは、図5は、間接発話行為に関わるスタンス変化の複合的コントロールサイクルを表すと言える。

第3行は、質問シナリオに対応する。文字通りの質問は、潜在相(T₁)として [I want to ask you if [you can take out the garbage]_p] <DESIRE> という話し手の要望の認識的スタンス S_{ep} <DESIRE>, 行為相(T₂)として、質問の発話 *Can you take out the garbage?* によって表現される話し手の質問の実効的スタンス S_{ef} <QUESTION>, 結果相(T₃)として、聞き手に *Yes, I can.* という返答 H_{ef} <ANSWER> が期待される⁽⁶⁾。さらに典型的には、返答によって [we believe that [you can take out the garbage]_p] という話し手と聞き手の共通認識 S/H_{ep} <BELIEF>(T₄) が期待される。この話し手の質問シナリオは、聞き手の返答シナリオとみることでもできる(第4行)。この場合、質問の潜在相と行為相が返答の潜在相にあたり、質問の結果相が返答の行為相と結果相にあたる。

ここでは重要となるのは、質問/返答の結果として見込まれる S/H_{ep} <BELIEF>(T₄)は、*Please take out the garbage.* のような依頼の適切性条件としても解釈できることである。(14b)では、文字通りの質問から期待される T₃ における聞き手の返答は実行されることなく、T₁ から T₄ までの質問シナリオは、依頼の潜在相として位置づけられる⁽⁷⁾。質問を依頼の一部として捉え直すこのコントロールサイクルの再解釈は、部分的手がかりから全体を推定す

る発見的推論の認知プロセスとみることができる。図5において、質問シナリオを参照点(reference-point; R)、依頼シナリオをターゲット(target; T)とする参照点関係は、(14b)の間接的言語理解を動機づける換喩的な発見的推論のプロセスを表す⁽⁸⁾。以下では、ここでの質問のように、文字通りの発話行為に関わるシナリオを参照点シナリオ(reference-point scenario)、ここでの依頼のように、間接的に理解される発話行為に関わるシナリオをターゲットシナリオ(target scenario)とよぶ。

5. 間接発話行為の修辞性

4節の事例分析に示されるように、間接発話行為には、発話行為シナリオのドメインにおける部分-全体関係にもとづく、参照点シナリオからターゲットシナリオへの換喩的プロセスが反映されている。本節では、間接発話行為に一般にみられる換喩的認知のプロセスに注目して、間接発話行為の機能に関する考察を行う。具体的には、発話行為の間接性から生じる修辞的效果、およびコミュニケーションにおいて担っている機能に関して、次の3つの観点から考察を行う。

(15) 〈間接発話行為の認知的動機づけ〉

1. 参照点の認知的際立ち
2. 参照点とターゲットの乖離^{かいり}
3. 焦点シフトの自然経路

一般に、間接性の動機が異なる発話行為は、異なる修辞的機能を担う。以下では、3つの動機づけをとりあげて、動機づけの差異からもたらされる修辞的效果の差異に着目することにより、間接発話行為の修辞的機能と認知のメカニズムに関する分析を行っていく。

5.1 第1の動機づけ—参照点の認知的際立ち

(14b)(14c)のような典型例に加えて、間接発話行為の事例を広く観察していくと、間接発話行為の修辞性には、ターゲットとなる発話行為シナリオのどの要素を言語化するかによって、多様性がみられることが分かる。(16)と比較して、(17)はより丁寧で間接的である。ここでは、この種の修辞性の差異が、どのような要因に左右されるかについて考察を行っていく。

- (16)a. 出て行ってほしい。
 b. 少しの間出てもらえますか。
 (17)a. 少しの間一人になりたい。
 b. そろそろ研究会の準備をします。

図5におけるRからTへの焦点シフトに示されるように、間接発話行為の概念化には、文字通りの発話行為を参照点、意図された発話行為をターゲットとする参照点関係の認知プロセスが関わる。一般に、参照点として選択されるものは、**認知的際立ち**(cognitive salience)が高いものである(Langacker 1993: 30–31)。例えば、図5の質問/返答のターゲットとなる[Hはpを行う能力をもっている]ということは、依頼が成立するための前提の中でも、一般的な条件である(3.3節表2参照)。

参照点の認知的際立ちは、換喩的認知一般の動機づけとなるものである。Thornburg and Panther(1997: 211)は、この第1の動機づけを間接発話行為の換喩的原理として示している。

- (18) 〈間接発話行為の換喩的原理〉
- a. より多くの発話行為要素が発話行為シナリオの周辺に位置するほど、その要素が換喩的にシナリオを表す可能性は低くなる。
 b. 談話上にあるシナリオの要素がより多く提示されるほど、部分から全体を推論しやすくなる。

(18a)からは、シナリオの中心的要素を参照点とする間接発話行為はより際立ちが高く自然であり、周辺の要素を参照点とするものはより際立ちが低く逸脱的であること、また(18b)からは、文脈によってシナリオの要素の認知的際立ちが変化することが示唆される。(18b)については、例えば、(17b)の発話文脈として「研究会の準備があるので、適当にお開きにしましょう」と前もって断っていた場合には、(17b)の依頼の間接性は下がる。

(18a)について、ある要素が「周辺」に位置するとは、具体的には何を意味するのであろうか。1つの見方としては、目的の要素からその要素までの論理的距離が挙げられる(*ibid.*, 212)。例えば、(16a)は、「出て行って下さい」という依頼が成立するための必要条件にあたるのに対して、(17a)は、この発話状況においては依頼の必要条件となるとともに(16a)の必要条件にもなっている。すなわち、(17a)は依頼の必要条件の必要条件となる点で、依頼に対してより周辺的であると考えられる。もう1つの見方としては、その要素の文脈依存性が挙げられる。すなわち、ある発話行為シナリオの中心的要素とは、その発話行為タイプのシナリオ全般に当てはまる内容であり、周辺の要素とは、発話状況に依存する内容であるとみることができる。(16)の陳述、質問の内容は、一般の依頼シナリオに共通する基本的で際立ちの高い適切性条件を表すものであるのに対して、(17a)および(17b)の陳述内容は、(16a)の理由にあたる。(17)のような依頼の理由は発話状況に依存して定まるものであり、依頼という行為一般に成り立つ条件ではなく際立ちが低い。この参照点シナリオの認知的際立ちの高低は、(16)(17)の修辭性の高低に反映されていると考えられる。

次の例では、着物を洗濯するために脱ぐようにという依頼に対する拒否の間接性は、参照点となる文字通りの発話の周辺性に動機づけられている。

(19) 「早く出して下さいよ。ほら、^{じゅばん}襦袢の襟^{えり}なんか、油光りしているじゃありませんか。」(…)

「きょうは寒い。」

(太宰治「舌切雀」: 313)

「着物を洗濯には出さない」という、拒否を直接的に表す発話に対して、(19)では、洗濯には出さない、その理由は着物を脱ぎたくないから、その理由は「今日は寒い」からという、理由の入れ子構造が問題となる点で、拒否までの論理的距離が大きい。また、拒否の理由となる原因は「今日」限りの一時的なものである点で、文脈依存性も高い。

(16)(17)の比較からも分かるように、際立ちの低い要素を参照点とすることによって、発話行為の間接性は増し、それに伴ってしばしばポライトネスに関わる修辭的効果が生じる⁽⁹⁾。間接発話行為の重要な修辭的機能のひとつは、聞き手に対する配慮を示し、発話行為を丁寧にする機能である。Brown and Levinson(1987: 132-144)では、自らの振る舞いが相手のフェイス(face)を侵害するおそれのある場合に、これを補償するポライトネス(politeness)のストラテジーとして、間接発話行為が用いられるとされる。依頼、命令等の行為指導型の発話行為は基本的に相手のネガティブ・フェイス(e.g. 邪魔されたくない、自由に振る舞いたい)を脅かす性質をもつものであり、この種の発話行為では典型的に間接発話行為がポライトネスの手段として用いられる。目的のシナリオにおけるより際立ちの低い要素が参照点として選択される場合には、発話行為はより丁寧になる傾向にある(cf. Leech 1983: 108)。

- (20)a. Will you find us a cab?
 b. Would you find us a cab?
 c. We should be so grateful to you, sir, if you found us a cab.

(Bernard Shaw *Pygmalion*, 16)

(20a)は、文字通りの質問から期待されるのは、[you will do X]という依頼シナリオの結果相全般に共通する実効的スタンスである(3.3.4節表2参照)点で、際立ちが高い要素が参照点となっている。これに対し、(20b)は過去時制形 would によって現実性を抑制することで際立ちを低下させている。(20c)の第1文の条件文は、(20a)(20b)のターゲットとなる依頼の結果

相を条件節で表し、その帰結である「we should be grateful to you」を主節で表すことで、参照点の際立ちをさらに低下させている。

(20c)のような条件節を用いた丁寧な依頼は、日英語に広く観察される。

- (21) もし今日だけ車を貸していただけると、本当に助かります。
- (22) 'If you please, sir, 'I flattered, 'if I might be allowed (I am very sorry indeed, sir, for what I did) to take this writing off, before the boys come back—' (Charles Dickens *David Copperfield*, 77)

(21)は(20c)と同様に、依頼の結果相を条件節として表現し、より際立ちの低い要素を主節として表現している。中心的な要素と周辺の要素を「XならばY」という含意関係として言語化することは、直接的な依頼から論理的距離をとっていることを類像的に表現するものとみることができる。(22)では主節が省略されており、*if*は文字通りの条件を表すというよりは、直接的な依頼から論理的距離をとっているということだけを示すポライトネスの標識となっていると考えられる。

一般に、種々のポライトネス標識を組み合わせると、より丁寧な発話行為を表現することができるが、厳密にはポライトネスのストラテジーの適切性はフェイスの侵害状況に応じて判断される。発話状況に見合わない過剰なポライトネス(*overpoliteness*)は、回りくどさに通じ、慇懃無礼ととられる場合もある(Leech 1983: 102)。

- (23)a. Could you do me the favor of shutting up?
 b. Would you very much mind if I asked you, please, to perhaps consider cleaning up your room sometime this month? (Seto 1998: 247)

以上に示されるように、ターゲットシナリオにおけるどの要素を参照点として選択するかという問題は、間接発話行為の修辭的効果に関わる重要な動機づけとなっていることが分かる。特に、発話行為の間接性はポライトネス

のストラテジーとして通言語的に観察される現象であり(Brown and Levinson 1987), ポライトネスの仕組みを明らかにしていく上で重要な言語現象であるといえる。

5.2 第2の動機づけ—参照点とターゲットの乖離

5.1節では、どのような内容を言語化するかによって、間接発話行為の修辞性が異なることをみた。間接発話行為の修辞性は、どのような内容を言語化するかということだけでなく、どのような言い方で言語化するかということにも左右される。

- (24)a. Can you take out the garbage?(= 15b)
 b. You can take out the garbage.

(24)の2例はともに依頼シナリオの際立ちの高い部分(i. e. 聞き手の能力)を参照点とするため、参照点が表す内容に関わる第1の動機づけの観点からは、両者は等価である。しかし実際には、(24a)は慣習的な依頼表現であるのに対して、(24b)は丁寧さにかける印象を与える(Leech 1983: 122)点で修辞性が高い。ここでの修辞性の差異の要因はどのようなものであろうか。

言語化されている意味内容は同じであるから、(24)の修辞性の差異は参照点となる発話行為のタイプの差異によるものと考えられる。重要となるのは、参照点とターゲットの乖離^{乖離}(discrepancy)の明示性である。図5のT₃に示されるように、(24a)の参照点となる質問シナリオでは、結果として聞き手の返答が期待される。しかし、聞き手がごみを捨てる能力をもっていることが自明である場合、(24a)に対して*Yes, I can.*とだけ返答し、何も行動しないというのは、コミュニケーションの一般原則から考えて逸脱的である。したがって、ここでは文字通りの発話行為とは異なる発話行為が意図されているということが前景化される。これに対して(24b)の陳述シナリオでは、結果として期待されるのは、同意や懐疑といった聞き手の心理的反応のみであ

るため、(24b)の陳述が文字通りに成立することによって、コミュニケーション上の逸脱性が生じることはない。よって、ここでは陳述と依頼の乖離は背景化されており、聞き手が話し手の意図を文脈(e. g. 「今日のごみ収集ですね。')のような発話を前もってしていた場合)や状況(e. g. ごみがずっと置きっぱなしになっている場合)から推察し、補完する場合にのみ、陳述を依頼シナリオの一部として再解釈するプロセスが喚起される。参照点から明示的に喚起される以上のシナリオを読み込むことに起因する聞き手の余分の労力は、(24b)の修辞性を動機づけていると考えられる。

以上の考察から分かるのは、参照点とターゲットの乖離の明示性の差異が、参照点シナリオの結果相における**実効／認識の対立**(effective/epistemic opposition)に密接に関わるということである(3.3.1節参照)。(24)では、この対立が文タイプの差異に反映されている。

次の例では、より詳細な言語形式の差異が、乖離の明示性に関わっている。

- (25)a. 静かにできるか。
- b. 静かにできるな。
- c. 静かにできないか。

(25)は命令を意図しているとみることができ、文字通りの質問から見込まれる実効的反応の逸脱性の程度に応じて、文字通りの発話行為と意図された発話行為の乖離の明示性は異なる。(25a)は最もニュートラルな疑問文であり、基本的に否定的返答は逸脱的であるものの、肯否ともに返答の可能性を残している点で、文字通りの質問の意味は明確に残っている。(25b)は上昇調のイントネーションを伴うと疑問文と解釈することができるが、話し手は肯定の返答を強く期待していることが終助詞「な」から含意されるため、通常の文脈では文字通りの質問としての返答はできない。(25c)は命令を表す慣用表現となっており、文字通りの質問とは異なり、命令が意図されているということは、言語的慣習から直ちに理解される。

次の例では、参照点とターゲットの乖離が極度に背景化されているために、意図された発話行為の理解自体が困難となっている。

(26) 「千重子さん、ちょっとでも手つだうてほしいわ。うち、つかれたわ。先生のお席のお手つだいやの。」

「この格好やったら、お水屋くらいやわ。」と千重子はいった。

「かまへん、お水屋で……。立て出しやさかい。」

「おつれがあるのよ。」 (川端康成「古都」: 17)

(26)では、茶席の仕事の依頼に対する、「千重子」の拒否の間接性が問題となる。千重子のはじめの発言は、一見すると、今の格好では客に直接茶を出すことはできないが、「お水屋」での仕事ならば手伝えるという提案のように見え、聞き手は実際そう解釈しているが、実際には拒否を意図していることが第二の発言から伺われる。千重子の文字通りの発話が想起する提案のシナリオでは、結果として、話し手が手伝いをすることが期待される。提案の文字通りの成立は、コミュニケーション上逸脱的どころか聞き手の望むところであり、文字通りの発話行為と意図された発話行為の乖離を読み取るのは困難である。

参照点とターゲットの乖離が背景化されているほど、参照点となる発話が文字通りに解釈されて誤解が生じる可能性は増加する。(26)では、楽観的な聞き手が暗示された意図を汲み取り損ねることが問題となるのに対して、次の例では、悲観的な聞き手が隠された意図を過剰に汲み取ろうとすることが問題となる。

(27) ^{つくだ} 佃は、その本を手にとって、あっちこっち返して見て、ききかえた。

「ぜひなくてはならないもの」

その調子が、伸子をしょんぼりさせた。彼女はあきらめて本を元のところに返した。

「一じゃあ又にするわ」 (宮本百合子『伸子(下)』: 25)

(27)では、「佃」の発言は文字通りには質問を表すものであり、実際に質問の意図で発話された可能性もある。しかし、「伸子」の視点からは、「佃」の話し方や普段の振る舞いから、文字通りの質問が「それは必要なものではない」という否認として解釈されている。

以上で論じた参照点とターゲットの乖離の前景化／背景化という動機づけは、発話行為の間接性に反映されている。(24a)のように乖離が存在することを明示する場合には、発話が字義通りではないということが明確になり、間接性は低下する。逆に、参照点とターゲットの乖離が存在することを明示しない場合には、発話行為の間接性は高まる。後者の場合、参照点となる発話は誤って文字通りに解釈されるという危険を伴う。(26)のような事例に象徴されるように、間接性にもとづく婉曲と誤解は不分離の関係にある。

このように、文字通りの意味と意図された意味の乖離の明示性という要因は、言語理解の間接性の基本的側面を特徴づけるものであると考えられる。命令等の行為指導型の発話行為に関する間接表現は、直接的な圧迫感をやわらげる点でコミュニケーションを効果的に促進する。しかし、過度の間接性は、率直さを失って誤解を生む点でコミュニケーションを阻害する場合もある。間接性をどの程度明示するかという問題は、配慮と誤解の関係を考察するための手がかりとなると考えられる。

5.3 第3の動機づけ—焦点シフトの自然経路

図5に示されるように、間接発話行為の概念化には、参照点シナリオを部分とし、ターゲットシナリオを全体とする、部分から全体への焦点シフトが関わる。図5の場合、 T_1 から T_4 までのコントロールサイクルが参照点となり、 T_1 から T_6 までのより大きなコントロールサイクルがターゲットとなる。つまりここでは、部分的に示されたシナリオ T_1 - T_4 から、それに後続するシナリオ T_5 および T_6 を補う認知プロセスが問題となる。

次の例では、参照点シナリオに後続するシナリオを補うプロセスか、先行するシナリオを補うプロセスかという点が、発話行為の修辞性の差異に反映

されている。

- (28)a. 明日の懇親会は、参加できる？
 b. 明日の懇親会は、参加するだろう？

(28a)の質問内容は、(14b)と同様に、「参加して下さい」という依頼の潜在相にあたる「聞き手が参加可能である」ということである。したがって、この質問から依頼を理解するためには、後続する依頼シナリオの行為相と結果相を補う認知プロセスが必要となる。これに対して(28b)の質問内容は、依頼の結果相にあたる「聞き手は参加するだろう」ということである。ここでは、「聞き手は参加可能である」(潜在相) > 「参加して下さい」(行為相) > 「聞き手は参加するだろう」(結果相)という典型的な依頼シナリオにおける最後部が参照点となっており、参照点シナリオに先行する潜在相と行為相を補う認知プロセスが必要となる。

ここに示す第3の動機づけは、部分から全体に到る焦点シフトにおいて補完されるシナリオが、参照点シナリオに後続するものであるのか、あるいは先行するものであるのか、すなわち、時間遷移の**自然経路**(natural path)の問題に関わるものである。自然経路とは、複合的な概念化において複数の要素を並べる際の認知的に自然な順序をいう(Langacker 1991: 291-293)。例えば、行為連鎖のエネルギーの流れにおける動作主 > 非動作主、イベントの時間遷移における先行イベント > 後続イベント、音韻極における先行要素 > 後続要素、図地分布におけるトラジェクター > ランドマーク等は、自然経路をなす。自然経路の観点からは、先行シナリオから後続シナリオへの焦点シフトよりも、後続シナリオから先行シナリオへの焦点シフトの方が逸脱的であるといえる。

次の例では、部屋の準備について家政婦に言うようにという命令の間接性が、焦点シフトの逸脱性に動機づけられている。

- (29) Cecily: Ask Mr. Ernest Worthing to come here. *I suppose you had better*

talk to the housekeeper about a room for him.

Merriman: Yes, Miss.

(Oscar Wild *Importance of being Earnest*, 73–74)

ここでは、Merriman の返答から Cecily の発話を命令とみなしていることが分かる。命令という行為が成立した場合、聞き手は結果的に命令内容を実行する義務を負う。この義務が参照点となって、義務に先行する直接の命令が補完されることで、命令シナリオの全体がターゲットとして理解される。

先行シナリオを補完するということは、言い換えると、意図された発話行為の結果を参照点として言語化するということである。(29)からも分かるように、この種の結果先取りの間接発話行為では、潜在相を参照点とする間接発話行為と比較して、聞き手に有無を言わせない、発話の力を強める修辭的効果がしばしば生じる。

(30) [Jack glares at him and does not take his hand.]

Cecily: Uncle Jack, *you are not going to refuse your own brother' s hand?*

(Oscar Wild *Importance of Being Earnest*, 92)

(31)a. 日曜の運動会見にくるよね。

b. まさかこのまま片付けずに帰るなんてことはないと思いますが。

c. 君、このプロジェクト、やってくれるだろうね。

(30)の握手を拒否しないことを確認する文字通りの発話は、*Jack* に握手を依頼する間接発話行為とみられる。依頼からは受諾が期待され、結果として、握手の実行が期待される。(30)では、この依頼シナリオの最後部が参照点となっており、自然経路に逆行する補完のプロセスが、間接性の動機づけとなっていると考えられる。また(31)のような発話は、形式的には直接の命令あるいは依頼ではないものの、話し手は聞き手が依頼／命令を引き受けることを前提に、依頼／命令の成立後に期待される聞き手の実効的スタンスを参照点とする間接発話行為であるとみられる。この種のターゲットシナリ

オの結果相を参照点とする間接発話行為は、日本語ではしばしば「一よね」「一ないと思いますが」「一だろかね」等の念押し、確認を表す言語形式を伴う。この種の念押しの標識無しに、聞き手への命令／依頼の意図で、下降調のイントネーションによって「*運動会見にくる」「*片付けずに帰ることはない」「*このプロジェクト、やってくれる」等と言うことはできない。

第1の動機づけ、すなわち参照点の際立ちの低さは、(23)のように発話文脈によってはインポライトネスにもつながるが、基本的にはポライトネスの動機づけとなる。これに対して、以上に示す第3の動機づけ、すなわち焦点シフトの自然経路からの逸脱は、高圧的、押し付けがましいという印象につながるものであり、基本的にインポライトネスに関わる。

- (32)a. You will take me home.
 b. You can take me home. (Leech 1983: 121)

命令の潜在相を参照点とする(32b)は、*You must take me home.* という意図で用いられる場合には、語気を弱めるポライトネスの手段となるのに対し、命令の結果相を参照点とする(32a)は、直接的には予言(prediction)と解釈されるものであり、むしろ明示的な命令よりも不躰な言い回しである(*ibid.*, 121-122)。

以上に示す、換喩的認知のプロセスにおける自然経路からの逸脱性は、後続するものから先行するものへという焦点シフトに関わるものであり、未来の予告は、聞き手に拒否、反論の余地を与えないという点で、基本的に間接発話行為のインポライトネスに反映されることがわかる。

6. 結語と展望

伝達したい内容を、言語によって過不足なく表現し尽くすことは不可能である。ある言語表現の文字通りの意味は認知的な参照点となって、伝達内容の全体を間接的に理解していくプロセスの手がかりとなる。ある存在に言及することによって、それと近接関係にある別の存在を表す広義の換喩現象は、この参照点の認知プロセスが最も顕著に反映されている言語現象の1つとして位置づけられる。

発話行為レベルの換喩現象では、発話行為シナリオのドメインにおける2つの発話行為の参照点—ターゲットの関係が問題となる。これまでの語用論研究では、意図された発話行為に関する適切性条件のどの部分が言語化されるかという点、言い換えると、ターゲットシナリオのどの部分が参照点として選択されるかという点のみが注目されてきた。これに対して本論では、ターゲットシナリオの(i)どのような部分を、(ii)どのような発話行為によって言語化するかという、2層の問題として捉え直し、これに対応して、発話行為の修辞性に関する2つの動機づけを示した。すなわち、第1の動機づけ—参照点として選択される部分のターゲット全体における認知的際立ちと、第2の動機づけ—文字通りの発話行為から想起される参照点シナリオとターゲットシナリオの乖離の明示性という要因である。さらに、本論では、発話行為シナリオをコントロールサイクルの観点から捉え直し、発話行為を、潜在的な条件から行為の遂行、期待される結果へという動的なシナリオ展開の概念化のプロセスの反映として位置づけた。この発話行為のダイナミックな側面に注目することにより、間接発話行為においてターゲットシナリオの(iii)どのような相を言語化するかという問題が出てくる。これに関連して、本論では、第3の動機づけ—参照点からターゲットへの焦点シフトに関する時間的な自然経路の問題を提示した。

本論では、基本的な発話行為や、間接発話行為の典型事例の構造を分析するだけではなく、発話行為の修辞性の問題を取り上げ、換喩的認知のプロセスという観点から、発話行為の修辞性の3つの動機づけを示した。この3

つの動機づけの観点からみて、間接発話行為の修辭性は、(i)認知的際立ちの低い部分を、(ii)ターゲットとの乖離が明示されにくい発話行為によって言語化し、(iii)焦点シフトが時間的な自然経路に逆行するものほど高いと言える。

本論では、一般の発話行為タイプに関して体系的な分析が可能となるように、コントロールサイクルとしての発話行為シナリオの中核部分だけに焦点をあてた。しかし、本論で注目した発話行為シナリオの性質は、発話行為現象のメカニズムの一端を示すものにすぎない。発話行為の成立には、少なくとも、話し手の社会的ステータス、話し手と聞き手の性格や社会的関係、ノンヴァーバルな記号の手がかり等の要因が関わっている。これらはいずれも、広い意味では、発話主体の認知に関わる問題であり、発話行為シナリオの重要な一部をなすものであると言える。発話行為はあらゆる言語使用に関わるトピックであるにも関わらず、認知言語学ではこれまで本格的な研究がなされているとは言いがたい。本論の分析は、一般的認知能力の観点から、発話行為のメカニズムとコミュニケーションにおける修辭的機能を解明していくための基盤研究として位置づけられる。

注

- (1) 間接発話行為という用語は、狭義には、(3)のような慣習化されたものに限定して用いられる場合もあるが、本論では、文字通りの発話行為と意図された発話行為の差異が認知されるものを広く、間接発話行為とよぶ。
- (2) これまで修辭学においては、空間的な隣接関係、時間的な因果関係、類と種の関係等にもとづくものが広く換喩とみなされてきた(佐藤・佐々木・松尾 2006: 253-257)。
- (3) この依頼の例では、次の二点に関して、ネズミの例とは異なる。第一に、ターゲットは物体ではなく、水を持ってくるという事態である。第二に、主体は客とウェイトアの二人である。この依頼は、客の視点からは、ある事態を欲し [Potential]、話しかけ [Action]、望みが実現される [Result] というコントロールサイクルであり、ウェイトアの視点からは、ある事態を客が欲していることに気づき [Potential]、話しかけられ [Action]、客の望みを実現

- する [Result] というコントロールサイクルであるといえる。発話行為の成立は相互的な行為のプロセスであり、この2つのコントロールサイクルが、同じ事態に対する2つの視点として位置づけられる時に限り、依頼が成立する。
- (4) Langacker(2009a)では、発話行為シナリオにはコントロールサイクルが反映されているという記述がみられるが、Langacker(2008)の時点では、発話行為シナリオの図式はコントロールサイクルの一種として分析されているわけではない。本論では、Langacker(2009a)の記述にもとづき、発話行為シナリオをコントロールサイクルとして記述することを試みた。
- (5) Langacker(2009b: 307)は、「複合的なイベントは複数のコントロールサイクルに関わることがあり、2つ以上の仕方で分析されうる」ことを指摘している。例えば、呼吸(breathing)という経験は、少なくとも図iiの3つの仕方で分析することが可能である。

OK	<i>need air</i>	<i>breathe/take a breath</i>			OK
		<i>inhale/breathe in</i>	<i>hold breath</i>	<i>exhale/breathe out</i>	
relaxation	tension	force	tension	force	relaxation
Baseline	Potential	Action			Result
Baseline	Potential			Action	Result
Baseline	Potential	Action	Result	Action	Result
			Potential		

図6 複合コントロールサイクル (Langacker 2009b : 307)

第1の解釈は、息を吸って吐くことを1つの行為とみるものであり、第2の解釈は、息を吐くことを1つの行為として焦点化するものである。第3の解釈は、息を吸うことと、息を吐くことがそれぞれミニサイクル(mini-cycle)をなし、息を吸っている状態が、息を吸うことの結果相であるとともに息を吐くことの潜在相となって、2つのミニサイクルが複合的に結合している。

- (6) 便宜上、実効的スタンスの内容を斜体、認識的スタンスの内容を角括弧で表示する。
- (7) 従来の発話行為研究において、この種の発話行為の複合性に関する一般化として最も重要なものの1つは、Gordon and Lakoff(1975)によって提唱された、会話の公準(conversational postulates)と呼ばれる語用論の原則である。会話の公準によれば、依頼の発話行為は、その適切性条件の一部を断定又は疑問の形式によって言語化することによって遂行される。会話の公準に準ずるアプローチでは、ある行為とその必要条件の論理的関係を間接発話行為の主

な動機づけとみている。これに対して本論では、個別の発話行為の基盤となる認知プロセスの複合性の観点から、間接発話行為のより詳細な動機づけを考察していく。

- (8) ここで、「ターゲット」という用語は、コントロールサイクルに関するものと、参照点能力に関するもので多義的に用いられていることに注意する必要がある。参照点能力の基本的性質は、Langacker(1993)では、コントロールサイクルとは独立に説明されているが、Langacker(2002: 212–213)では、参照点能力はコントロールサイクルの一種として位置づけられており、この点からは、図5は、発話行為シナリオと参照点関係からなる1つの複合的コントロールサイクルとみることも可能である。
- (9) ただし(19)に示されるように、間接性が常にポライトネスをもたらすわけではない。

引用例出典

- Dickens, Charles. (2010 [1850]) *David Copperfield*. Philadelphia: Craft Publishing.
- Shaw, Bernard. (2003 [1916]) *Pygmalion*. London: Penguin Books.
- Wilde, Oscar. (1916 [1899]) *The Importance of Being Earnest: A Trivial Comedy for Serious People*. London: Methuen.
- 川端康成. (1970 [1962]) 「古都」『川端康成全集第十二巻』 pp.7–196. 新潮社.
- 太宰治. (1972 [1945]) 「お伽草紙」『お伽草紙』 pp.215–334. 新潮社.
- 宮本百合子. (1954 [1924]) 『伸子(下)』 岩波書店.

参考文献

- Bain, Alexander. (1887) *English Composition and Rhetoric*. 4th edition. London: Longmans.
- Brown, Penelope, and Stephen C. Levinson. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gordon, David, and George Lakoff. (1975) Conversational Postulates. In *Syntax and Semantics Volume 3: Speech Acts*, pp.83–106. New York: Academic Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar: Volume II Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1993) Reference-point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4

(1): 1–38.

- Langacker, Ronald W. (2002) The Control Cycle: Why Grammar is a Matter of Life and Death. *Proceedings of the Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association 2*: 193–220.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2009a) Enunciating the Parallelism of Nominal and Clausal Grounding. In *Investigations in Cognitive Grammar*, pp.148–184. New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2009b) Finite Complements in English. In *Investigations in Cognitive Grammar*, pp.290–326. New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2010) Control and the Mind/Body Duality: Knowing vs. Effecting. In Elzbieta Tabakowska, Michal Choinski, and Lukasz Wiraszka (eds.) *Cognitive Linguistics in Action*, pp.163–207. New York: Mouton De Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2013) *Ten Lectures on Cognitive Grammar: Demensions of Elaboration*. Beijing: The 13th China International Forum on Cognitive Linguistics.
- Leech, Geoffrey N. (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Panther, Klaus-Uwe and Linda Thornburg. (1998) A Cognitive Approach to Inferencing in Conversation. *Journal of Pragmatics* 30(6): 755–769.
- 佐藤信夫・佐々木健一・松尾大. (2006) 『レトリック事典』大修館書店.
- Searle, John R. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, John R. (1975) Indirect Speech Acts. In *Syntax and Semantics Volume 3: Speech Acts*, pp.59–82. New York: Academic Press.
- Seto, Ken-ichi. (1998) On Non-echoic Irony. In Robyn Carston, Nam-Sun Song, and Seiji Uchida (eds.) *Relevance Theory: Applications and Implications*, pp.239–255. Amsterdam: John Benjamins.
- Thornburg, Linda, and Klaus Panther. (1997) Speech Act Metonymies. In Liebert, Wolf-Andreas, Gisela Redeker, and Linda Waugh (eds.) *Discourse and Perspective in Cognitive Linguistics*, pp.205–219. Amsterdam: John Benjamins.
- 山梨正明. (1982) 「比喩の理解」佐伯胖(編)『推論と理解』pp.199–213. 東京大学出版会.
- 山梨正明. (1986) 『発話行為』大修館書店.

山梨正明, (1988) 『比喩と理解』 東京大学出版会.

山梨正明, (2004) 『ことばの認知空間』 開拓社.